

楽しかったことに感謝を込めて、 ありし日々に関心を込めて

裴 崢

目次

- 1 言語から入った日本への道
魯迅の娘にロシア語を教わる
遠回りの道
パンダ、牛、そして北海道へ
- 2 留学して得たもの
学ぶことの喜び
学ぶことから得た喜び
- 3 私の言語教育哲学
楽しませる授業は、楽しむ授業
ユーモアの効用
授業をエンジョイ
- 4 教科書に寄せて
- 5 私の原点
黄色い大地からの贈り物
異文化、回り道の冒険
- 6 中日交流の来た道
相互理解の道を歩む、彼も我も
心を通い合わせ、共に“和”を進めよう

誰しも退職の日があります。退職とは、卒業に似ていて、人生の一つのステップを踏み越えると共に、次の新しいステップへ向けての邁進を意味します。これまで忙しさにかまけて捨てる暇もなく、来た道々に散らばっていた数々の大切なあれこれをしっかりと心に収め、明日への糧として出発します。

1 言語から入った日本への道

魯迅の娘にロシア語を教わる

1964年、私は中高一貫の北京師範大学附属女子中学校に入学し、外国語の科目ではロシア語を学ぶクラスに振り分けられました。この年、共産圏では中国とソ連の対立はすでに深刻化し、国家間の外交関係も断絶状態でした。

ロシア語の授業を担当したのは中国の文豪・魯迅の一人息子の妻、つまり魯迅の義理の娘の馬新雲という熱心な先生です。口の開け方や舌の位置などを丁寧に師範しながら、発音から指導してくれました。しかしロシア語は手強い相手です。独特の巻き舌で発音する「P」の音は声すら出せず、至難の業でした。放課後の教室の掃除の時、雑巾を絞りながら練習し続けていたら、ある日突然はっきりとした声が出ました。早速先生に聞かせに走って行ったことを覚えています。

中学1年の後期に、先生はわざわざ私を自身が担当している高1、お姉さんクラス（中1と高1の同じ組が互いに姐姐（お姉さん）班、妹妹（妹さん）班と組まれていた）に誘い出し、お姉さんたちの授業を聴講させてくれました。流行の英語を履修できずに落胆していた私は、生徒に対する先生の愛情が身に沁み、ロシア語という異なる言語の学習に何となく意欲を感じるようになりました。

遠回りの道

1966年、中学2年の年が終わろうとする初夏に、中国では文化大革命、いわゆる「文革」という政治運動が起こりました。社会主義の道を歩まず、資

本主義や異なった道を歩もうとする集団や人を肅清するためと称して、中国全土の民衆がこの運動に参加させられました。

間もなくして政府から、都会の若者は、中学生、高校生も農村や僻地に行き、社会実践を通して、教室では学び取れない知識や経験を習得すべきだと指示が通達されました。私も1969年から約4年間、北京も学校も遠く離れて、地方の農村や工場などで地を耕し、労働に汗を流しました。この文革時代の教育政策を「下放」、つまり下へ放つ、と呼称します。地方へ赴く（赴かされる）、または社会の底辺へ向けて旅立っていけ、という意味でしょう。その代わりに、大学進学などの大半の通常教育の道は閉ざされました。

やがて地方の銑鉄工場で電気修理工になった73年から、志望校や専攻の選択の自由はなくとも、大学受験が徐々に再開されました。私も遠回りした分を取り返そうと、早速参加しました。本来なら当時の職業にちなんで電気工学を学ぶ予定だった私は、受験後、知り合いとの雑談中、そこに通りかかった中年の女性から「もし合格したら、あなたは日本語を習ってみませんか」と声を掛けられました。地元出身の多い受験生の中で、私の北京語がちよっと目立っていたのかもしれませんが。声を掛けた女性が四川大学の先生だったことは後で分かりました。この偶然なききっかけで、日本語と出会い、四川大学日本語学科に入学しました。時は中国と日本が国交正常化を迎えた翌年です。

当時、戦後数十年も国交がなかったために、中国のほとんどの大学には日本語教育の専門家がいませんでした。四川大学で私たちの教育にあたった先生は4人も実は現役のロシア語教師で、中日国交正常化のために間に合わせで、たった1年前に急遽選ばれて日本語の集中学習を受けたばかりの方々です。目まぐるしく変わっていく時勢の中で、あの熱血ロシア語教師の馬先生は北京で今何語を教えておられるのかなあ、と時々思いました。

大学卒業後は、湖北省外事弁公室に配属されて、地方政府間の中日交流を促進する仕事に携わりました。日本からの色々な訪問団の接待から、新日鉄の圧延プラントの中国輸出プロジェクトや、湖北省の省都・武漢市と大分市

の姉妹都市提携協定事業などに携わりました。新しいスタートを切ったばかりの中日関係の第一線での仕事は面白くてやり甲斐がありましたが、自分の日本語の知識の浅はかさに汗顔の至りの毎日でもありました。

1979年から、中国は改革開放政策に舵を取るようになり、日本への関心が高まりつつありました。日本語学習の機会は、ラジオ・テレビをはじめ、夜間学校、サークルなど続々と現れました。その気運に乗って、私は北京外国語大学の大学院に進学しました。

大学院を出てからは、日本語の講師として北京郊外のある大学の教壇に立つ立場となりました。しかし、勉強不足の感はやっぱり拭えず、今度は、自分でさえ生煮えの授業の説明では学生にとっても納得してもらえないなあ、という教え手としての後ろめたさが加わりました。

パンダ、牛、そして北海道へ

1980年代初め、パンダ外交のエピソードは有名です。中日友好の使節者としてパンダのランラン（蘭蘭）とカンカン（康康）が海を渡り、上野動物園に入居しました。一方、実はその頃、もう一つの動物にちなんだ逸話があった筈です。北海道の酪農農家、湯浅忠夫さんという方が、戦争中に中国人から命を助けられた恩返しにと、種牛を中国に寄贈しました。この日本国籍の種牛が中国の牛乳改良の重大任務のため、新設された北京の「中日友好奶牛場」に家を構えて住みつく運びとなりました。

牧場の命名式終了後の祝賀パーティーに、知人に急に頼まれて、私はその場凌ぎの通訳として2時間ほど同席しました。食卓の雑談で他の人の留学の話に花が咲きます。思わず、「いいなあ」とぼろり。すると、「貴女も留学したいのかい？　じゃ、ここに連絡先を書いて下さい」と、手前に皺くちゃの紙ナプキンが広げられました。期待せずに言われた通りに書いて渡しました。

「開け、ゴマ！」とでも無意識のうちに念じていたのか、日本各地と北海道の知人・友人・関係者の助けと応援を得て、1986年の春、夫に託した一歳半の娘に後ろ髪引かれる思いを断ち切って、留学の地、日本に飛び込みました。

2 留学して得たもの

学ぶことの喜び

北海道大学教育方法研究科に入学し、中国人の日本語学習者を対象に日本語の教授法、特に上級日本語教育での文学作品の読解の指導方法を研究しました。指導教官はそれぞれ国語、物理、数学、言語教育と幅広い研究者です。畑違いの数学、物理の教授法から思わぬ啓発を受けたりして、大変有難かったです。施設、資料も整っており、勉強には恵まれた環境でした。

中国での院生時代は、日本でもあまり読まれていない女流作家野上弥生子の『迷路』を研究対象にしました。東大の秀才だった主人公が、左翼思想に共感し、進歩活動に参加したため、大学から退学させられ、軍隊に招集されます。赴いた中国の戦場で中国人を撃ち殺し、良心の呵責に苛まれた彼は、やがて延安の日本反戦連盟の活動を知り、危険を冒して、延安へ脱走しようとし、不幸にも途中、自国軍の銃弾に倒れ、生死不明となるというストーリーでした。20年を費やし、4冊にわたって綴られたこの長編小説は、一般的にストーリー性の強い中国文学と相通じるところがあって私を惹き付け、修士研究ではこの作品の思想性、社会性を探求しました。作者の出身地・大分県が私の就職先だった武漢の提携都市であり、作品中の最後の舞台が、私の中学時代の下放の地、延安であることにも不思議な巡り合わせを感じました。

しかし、振り返ってみると、修論では『迷路』を文学作品として読み込むには至らなかった、と反省するようになりました。文学の世界は豊かな世界です。特に日本文学の多くはストーリー性よりも、作品の内面を構築する表現を重んじ、繊細で、含蓄に富み、曖昧模糊とした特質や情緒を孕んでいます。こうした重要な特質を疎かにしてしまっただけでは、本当に読み込んだとは言いがたいです。従って、北大留学にあたっては、この反省をバネに、表現課題方式を使った指導法に取り組むことにしました。

具体的には、日本の国語教材にも多く採用されている芥川龍之介の『蜜柑』、

井伏鱒二の『山椒魚』など、いわば日本文学を代表するような優れた短編を取り上げて、作品分析した上で授業案を作り、実践授業で表現課題方式の指導過程を実証しました。たとえば『山椒魚』では、冒頭から「山椒魚は悲しんだ。」と、このたった二語なのに雄弁な表現が、早くもグロテスクで、悲劇的なのに滑稽な主人公山椒魚の奇妙な状況を読み手に呈します。「ああ、寒いほど独りぼっちだ！」という、この山椒魚の次のセリフからは、彼の感傷的なすすり泣きだけに留まらず、洒落も聞こえ、またハムレットのような哲学者の深い感懐も連想され、読み手の複雑な笑いを誘ってしまいます。こうした効果的、或いは鍵となる表現に注目して、適切な課題を設定します。そして課題への取り込みを通して、表現の意味、文脈と文脈の間の必然的な繋がりを吟味し、理解します。こうして授業案では『山椒魚』の独特な文学世界をより豊かに読み取ろうとします。中国人学習者ではありませんでしたが、日本人学習者向けの授業実践から、当指導法は大よそ予測通りの目的を達しました。

学ぶことから得た喜び

一方で、文学作品を教えるために考案したこの課題方式の試みを、言語習得の指導にも活かせないか。特に文法の指導では、こうした比較の見えやすく、掴みやすい、概括を通して学習を進歩させていく方法がないか、と教育法分野を跨いだ「浮気」もその頃ちらちらと考えるようになりました。文学教育も言語教育も、扱う材料は言葉の表現なので、共通点があるからです。

実は当時、研究の合間を縫って、大学での非常勤講師、文化センター、公民館などでの中国語講師のアルバイトをしていました。そのため、中国語の構文の骨格である構造、機能を系統的に、或いは図式的にもっと上手く伝えられたら、と悩んでいました。私にとっては、当時は研究とバイトの生計立てに追われて、文字通り貧乏暇なしの日々でしたが、学ぶことと教えること、日本語と中国語、文学と言語といった、異なる分野の思考方法を日常的に行

き来できる都合のいい立場でもありました。課題を発見する上では、とても有用なことです。

また、教科書問題、天安門事件などの政治的な出来事が起こると、「中国語を口にすると、吐き気がする」と受講者からストレートに言われたりして、困惑しましたが、逆に言語の学習に留まらず、互いに民間人同士として意見を交わし、理解を深める機会にもなりました。国籍や歴史などを超えた、人間と人間の素朴な心の通い合いを味わえました。留学生時代は、以前にも増して多くの方々に助けられ、キャンパスの内外での多くの出会いから、人生も学びました。馴染みのない環境、従来と違う日常の新鮮さに目を見張り、悩んだり、喜んだり、うんざりしたり、感動したりする、その時を確実に生きていました。

商大の中国語教員公募の情報も、中国語サークルの受講者から教えてもらって知りました。人生とは不思議な出会いの繰返しでもあるようです。

3 私言語教育哲学

楽しませる授業は、楽しむ授業

92年4月から商大で中国語を教えるようになりました。語学は2年間必修です。この2年間の授業で、中国語の基礎を身につけ、中国語や中国文化に興味を持ち、勉強する意欲、いずれ独学できる素養が学生に育てばいいと思いました。欲を言わせれば、必要に応じて、卒業してからも何かの役に立てればとも願いました。

授業中は、学生とともに授業を作ることを大きな目標としました。練習のチャンスを多く与え、楽しく勉強できる雰囲気と、大きな声を出す全員参加の授業を目指しました。異言語の学習は、最初は新鮮で、物珍しく、面白いかもしれません。段々、文法や文型に入ると、無味乾燥で、教える側は教師ではなく、睡眠術師になってしまいそうです。堅苦しい理屈や抽象的な概念に沈んでしまわないために、例文や練習のやりとりをフレッシュで楽しいも

のにすることができれば、と試行錯誤することを心がけました。

例えば、なんの変哲もない単純な数、曜日、年月日などの練習は、順番通りの繰り返しだけでは飽きやすいし、教える側も学ぶ側もつまらないです。奇数や偶数を数えさせてみたり、足し算引き算の問題を中国語で解いたりさせてみると、もっと意欲的な受け答えが期待できます。好きな曜日や嫌いな曜日、ご両親の誕生日や、卒業予定年などと、自分たちの環境に関連付けて問いかけると、単調な数字も意味を持つことになり、学生の答えも形式だけではなく情感が流れて来ます。

ユーモアの効用

もう少し発展した内容になると、基本文型の構造と意味を説明した後で、反復練習による記憶の定着を図ります。が、変化の少ない機械的な繰り返しよりも、学生にとって身近で、かつコミュニケーションな課題を与えれば、練習を楽しみ中で効率よく定着できるのではないかと考えました。従って、文例などの直訳の練習より、応答できるような問いかけ方を多く採用しました。質問もどんなものでも良いというわけではなく、全体として適切で学生の注意力と思考を促すことができるものでなければなりません。学生の日常生活や大学生活などに関連のある話題について、新しい文型、単語を利用できるような質問、しかもその質問は「“什么（何）”」、「“什么时候（いつ）”」、「“哪儿（どこ）”」、「“为什么（なぜ）”」、「“怎么样（いかが）”」、「“怎么（どのように）”」などの方がよかったです。

「…買いたい」という文の応用を繰り返すとしましょう。「セーターを買いたい」、「漫画を買いたい」……、このような有り触れた練習に熟練してくると、「会社を買いたい」、「銀行を買いたい」、「時間を買いたい」とバージョンを変化球に切り替えます。正当性はないかもしれませんが、意外性の効果を触媒として、興味という「化学反応」がより長く続き、学生は飽きる暇がなく、身を乗り出して付き合ってくれます。

また、こういった丁々発止の授業になってくると、授業中のユーモアが適

切なスパイスの役割を果たします。『山椒魚』ではありませんが、笑いや意外性のある表現は、ぎゅっと意味が凝縮されたようで印象に残ります。具体例を挙げると、「…しながら…する」の構文では、「授業に出ながら寝る」、「寝ながら授業に出る」という文の中国語訳を求めました。常用単語なので、難しくありません。表現の論理性は弱くとも、まったく不合理だとも言い切れず、人によっては経験したこともあるかもしれません。何より目覚ませ効果が抜群です。それまではひどく眠かったとしても、この瞬間に眠気が覚めてしまいます。得意そうに、或いは決まり悪そうに口元を緩めながら、全員が朗々と正確にこの課題をクリアできます。

もちろん学生を一方向的にいじめるばかりでは不公平なので、教師として自虐も覚悟しました。体重の質問は遠慮してもらおうのですが、年齢はOKとしました。すぐに「你今年多大？」と声を揃えて聞いてくれます。「十八岁！」と堂々と対応しました。誠実な答えを期待していた彼らは拍子抜けしますが、こちらは期待を裏切る楽しさと、厚かましが合わさって、にやにやとします。私にとっては、格好悪かったですが、これで年齢の聞き方を練習したばかりでなく、答えもちゃんと聞き取れたことが裏付けられて、学生の皆さんはいい気分になり、退屈な文型のやり取りも少しは楽しくできたでしょう。馬鹿げた問いかけもあったようですが、全員で対話を作り上げる面白さや、多様な場面に臨機応変に応用できる意外性を体験しながら、活発な練習ができればというのが狙いです。

中国語で自己紹介をする教室活動もたまたま設定しました。黒板の前でみんなに向かって行かないです。ピリピリと緊張した発表者と、上の空で注意散漫になりがちな聴衆側を中和させるには、教師が主役の緊張を和らげ、観客の意識を集中させるように配慮しなければなりません。まずは一人一人の発表者と共に教室の前に立ち並びます。そうすれば、一人きりの戦いではなく、戦友がいるという安心感が芽生えるでしょう。更に接着剤といえれば良いのか、発表の開始・終了後にも適当に軽く言葉を挟みます。たとえば今度は背の高い発表者と並びました。「海拔が高いね」とコメントを漏らすと、教室中に

哄笑が湧きたちました。ひょっとすると、その時の笑いによって教室にいる皆の心を結びつける絆も生まれたかもしれません。とにかくこの笑いの共有で学生たちの注意力が集中され、当事者もスムーズに自分の発表に入っていました。

教育の最大の趣旨は生きる喜びを感じることです。また、言語学習では学生自らが実践をすることが大事です。学生の自尊心、能力に配慮しながら、適切な教室活動を展開することは、学生の意欲を誘い、反応を鍛え、能動的な授業参加につながります。自分たちの日常と結びつけることで今習っている無味乾燥な単語や文法も応用でき、生き生きと表現することで、また記憶に残り、授業も楽しくなるでしょう。そんな願いを抱きながら毎年の学生たちと二人三脚で授業を作り上げてきました。

授業をエンジョイ

教室は集団の空間です。学習の場としてのみではなく、人間同士の交流の場でもあるため、雰囲気作りが不可欠です。教師も指導者ではなく、授業の一参加者として、表現の方法や温度を工夫・調整することで、集団の中の不安や緊張を和らげ、お互いに親近感を高め、また、時には学生と教師という立場の違いによる心理的な距離も縮める、といった努力が必要です。また、言語は単なる言葉だけではなく、その裏にある思想、思考方式を表現するものです。教師は、口で生計を立てていると言われるほどで、言語教育の場合にはなおさら表現を大事にすべきではないかと思います。

学生には、それぞれ違った個性があり、素晴らしい能力を備えています。学生とともに中国語の授業を行なってきて、学生が私の授業を支えてくれ、学生が授業の良し悪しを教えてくださいました。

正に学生諸君のお蔭で、表現することで教室の雰囲気を活発化させ、学生の喋りたいという意欲を刺激し、共感の効果を育むことの大切さを学びました。何よりも、相手に楽しく勉強してもらおう云々という言語教育の目的を達するには、まずは自分自身が授業をエンジョイしようということを悟ったの

です。教師とは何と恵まれた職業でしょう。自分たちは年々歳を取りますが、向き合う対象は永遠に歳を取らないのです。青春や若者のエネルギーに触発されつつ、愉快的数々の思い出を与えてくれた学生に感謝したいです。

4 教科書に寄せて

2012年5月から16年8月までの4年間、「商大生のために教科書を作りましょう」との掛け声を受けて、教科書制作の共同作業に取り組みました。お世話になった商大を去る前に何か恩返しがあればと、チャンスにも思い、真剣に取りかかりました。

情緒的、或いは曖昧な日本語に対して、中国語は論理的、明確です。助詞も動詞や形容詞の活用もない孤立語である中国語にとって、語順は大事です。従って、この中国語の言語構造としての論理性を適切に反映することを、教科書制作の大きな目標としたわけです。それまでの私自身の教育の実践と反省をもとに、院生時代から芽生えて、温めてきた指導法を盛り込みました。この文法の考案と作成については、実は一番脳みそを費やしました。

次に、中国語の先行教科書を数多く検討した上、当教科書の作成に際して、課ごとの分量と構成パターンなどを具体的に次のように方向づけました。新出単語は、固有名詞を避け、一般的で使用頻度の高い、ついでに商大生にいつか役立ちそうな経済や金融、為替、取引などの語彙、語句を適切に取り入れて、練習に聞き・話し・読み・書く、四技能にわたる問題をパターン式で多様に用意します。本文は、初級では、基本表現とそれを端的に反映できる叙述体の短文、中級では、四季の移り変わりとともに展開される日本や中国の小話を、交互に綴る叙述文や会話文。講読編では季節感も持たせながら、学校生活を舞台にした小話の他、中国人の日常生活、中国の文化に関する読み物、代表的な唐詩、日本でもよく知られる古典の抜粋などで、それぞれ構成します。なお、講読編の話題は、最初に試作した多数の原稿の中から、基礎中国語の学習を終えた本学の学生皆さんにアンケートをとって、彼らの興

味のあるものを選択させた上で最終的に決定したものです。

教科書作りは論文推敲とは全然違います。論文は、脱稿後の結果は過分に気にしなくてもいいと言えます。読み手から間違いの指摘や批判があったとしても、研究者個人の責任になり、少なくとも人様には特に迷惑をかけません。これに対して、授業で使用するものである教科書は、完成後の結果こそが勝負です。実践の検証に耐えられなければなりません。100%完璧なものは不可能でも、完成度がないと、使用者に迷惑を掛け、使い物になりません。換言すれば、作成者と使用者双方の願いに適って、初めて価値が実現できるものなのです。

なので、作業中から、今作成しているこれまでの教育者としての自分の教訓、今の学生たちからの生きた意見、そして将来の使用者、と常に三方の立場に立つ必要があります。まるで過去、現在、未来の中国語教室との対話のようです。文型や用法の一つ取っても、これまで、今、そしてこれからの使用者ならどんな理解度があって、どのような疑問、要望を持つだろうか、と同時にいちいち予想して、それらに答えられるかどうかを斟酌しなければなりません。ともすれば八方美人になってしまいます。ましてや全体の効果的な構成、細かな入力、さらに終盤になってくると永遠に終わりそうもない誤植の確認……。頭脳労働というよりも、肉体労働でした。途中でくたびれてしまい、共著者の入れ替わりもあり、私自身も投げ出したかった時もあります。

幸いにも、私家版で、3年間商大で試用して大幅に加筆修正や改訂による改善を繰り返しながら、よりよい教科書をつくる機会に恵まれました。その間、共著の先生を初め、多くの先生方から貴重なご指導とご意見を賜りました。授業担当の諸先生方の多大なご協力も頂きました。学生たちも粗末で、間違いの多い初期ものを辛抱強く使ってくれました。安かったことも幸いだったかもしれませぬ。

試用期間中の主な反響は次のようなものでした。授業担当者や中国語専門家側には、「生きた教科書と感じた。そのため少し難しい箇所もあった」、「中

国人の使う自然な中国語と感じ取った」、「ポイントの用例が短文などの単調な重複になっていないところが気に入っている」、「練習が多くて、形式が飽きさせない」。学生側からは、「左ページの単語などと右ページの文法の構成が助かっている」、「用例が会話によく利用できる文になっている」、「教科書作成者の真剣が伝わっている」、「練習Aの読み物に、ピンイン表記を付けてほしい」、「部活の他の外語を習っている何人からも、よくまとめている、わかりやすいね、とかと言われた」、など、ざっくりとした感想から使用者としての細かな要望を伝えるフィードバックまで、実に豊かな声が届きました。

おかげさまで、『中国語の香り』というタイトルで、一昨年4月、8月に、初級、中級、講読編、3冊とも前後してめでたく正式の出版の運びとなりました。授業に採用した他大学の担当者から、「温かいものを感じた教科書だ」と励ましてくれ、出版社では1冊目の増刷も決定されました。

教科書の作成期間の4年間は、大学生の在学年数と重なります。叩くとまだまだボロが零れてしまうに違いありませんが、商大を去る前に、私としては、一応「卒論」を提出できて、ほっとしました。この課題提出まで、時に厳しく、時に忍耐強く支え、励まし、勇気づけてくれた、広く中国語教育で活躍されている同僚の皆さんに、改めて「ありがとう」と伝えたいです。



14

Dì shì sì kè
第十四課Tā huì bāo jiǎozi
她会包饺子

基本表現

助動詞“会”と動詞“会”

1 Tā huì bāo jiǎozi.
她会包饺子。

88

2 疑問詞+“都/也”
Mèimei shénme dōu bú huì.
妹妹 什么 都 不 会。3 様々な反復疑問文
Míngtiān huì bu huì xià yǔ?
明天 会 不 会 下 雨?

短文

89

Gāoqiáo de jiārén dōu hěn yǒu tècháng. Māma huì zuò cài, bàba huì huá xuě,
高桥 的 家人 都 很 有 特长。妈妈 会 做菜，爸爸 会 滑雪，
mèimei huì chàng gē. Gāoqiáo huì Yīngyǔ. Xiàxīngqīwǔ liúxuéshēng kāi jiāoliúhuì, tā
妹妹 会 唱 歌。高桥 会 英语。下星期五 留学生 开 交流会，他
kěndìng huì cānjiā. Búguò, Gāoqiáo tìyù bù hǎo.
肯定 会 参加。不过，高桥 体育 不 好。

Dìdi ne? Dìdi bú huì shuō Yīngyǔ, kěshì tìyù búcuò, shénme dōu huì.
弟弟 呢? 弟弟 不 会 说 英语，可是 体育 不错，什么 都 会。

新出単語

90

1 会 huì	助動詞 動 …できる、…するの が上手だ、…に違いない	10 交流会 jiāoliúhuì	名 交流会
2 包 (饺子) bāo(jiǎozi)	動 (ギョーザを)作る、包む	11 肯定 kěndìng	副 きっと、間違いなく
3 下雨 xià/yǔ	動 雨が降る	12 参加 cānjiā	動 参加する
4 家人 jiārén	名 家族の人	13 玩 (儿) wán(r)	動 遊ぶ
5 特长 tècháng	名 長所、特長	14 游戏 yóuxì	名 ゲーム
6 菜 cài	名 料理	15 说话 shuō/huà	動 話をする
7 滑雪 huá/xuě	動 スキーをする	16 知道 zhīdao(zhīdào)	動 知っている
8 唱歌 (儿) chàng gē(r)	動 歌を歌う	17 法语 Fǎyǔ	名 フランス語、(法国 フランス)
9 开 kāi	動 開く	18 乒乓球 pingpāngqiú	名 卓球
		19 酒 jiǔ	名 酒

 学習のポイント

1 助動詞“会”と動詞“会”

主語	述 部					“会”の意味
	副詞	助動詞	動詞	目的語	語気助詞	
Nàinai 奶奶		hui 会	shàng 上	wǎng 网	ma? 吗?	技能
Wǒ 我	bù (不)		huì 会	Shànghǎihuà. 上海话。		…できる
Didi 弟弟	hěn 很	hui 会	wánr 玩儿	yóuxì 游戏	ba? 吧?	得意
Nín 您	tài 太	hui 会	shuō 说	huà 话	le! 了!	…するのが上手だ
Tā 他	bù (不)	hui 会	lái 来		de . (的)。	可能性
Nǐ 你	kěndìng 肯定	hui 会	chàng 唱	Zhōngguó gē . 中国 歌儿。		…するはずだ

2 疑問詞+“都 / 也”

疑問詞+“都”は肯定文・否定文の制限がないのに対し、疑問詞+“也”は否定文にのみ用いられる。

疑問詞+“都” (肯定文)	“疑問詞+都/也” (否定文)	
Shénme dōu huì . 什么 都会。	Shénme dōu yě bú huì . 什么 都 / 也 不会。	何(で)も…(ない)
Shéi dōu zhīdao . 谁 都知道。	Shéi dōu yě bù zhīdao . 谁 都 / 也 不知道。	誰(で)も…(ない)
Nǎtiān dōu yǒu shíjiān . 哪天 都有 时间。	Nǎtiān dōu yě méiyǒu shíjiān . 哪天 都 / 也 没有 时间。	どの日(で)も…(ない)
Nǎr dōu xiǎng qù . 哪儿 都 想去。	Nǎr dōu yě bù xiǎng qù . 哪儿 都 / 也 不想 去。	どこ(で)も…(ない)
Duōshao qián dōu mǎi . 多少 钱 都 买。	Duōshao qián dōu yě bù mǎi . 多少 钱 都 / 也 不 买。	いくら(で)も…(ない)

14

3 様々な反復疑問文 肯定形+否定形

Nǐ huì bu huì shuō Fǎyǔ ? Tā cānjiā méi cānjiā jiāoliúhuì ?
你 会 不 会 说 法语? 他 参加 没 参加 交流会?

▶ 目的語がある場合、次のような言い方もできる。

Míngtiān yǒu kǎoshì méiyǒu? Nǐ huì dǎ pingpāngqiú bú huì?
明天 有 考试 没有? 你 会 打 乒乓球 不 会?

5 私の原点

黄色い大地からの贈り物

朝、麓から地獄坂に向う通勤の道で、登校中の児童とよく出会います。小さな背中に揺れているランドセル。いいえ、ナップランド、小樽市だけでは「ナップランド」なのです。坂や雪が多いからでしょうか。日本では義務教育における平等を表すシンボルとも言えるこの通学鞆は、いつの間にか、私が商大で教鞭をとってきた約25年の間に、黒と赤2色のみの定番色から抜け出し、ピンクや水色、様々な色を組み合わせた複数の色合いとなり、通学の道をより華やかに飾るようになりました。雪道に映えて色鮮やかです。

47年前、1969年の冬も、私は真っ白い山道を歩いていました。中国北西地方の延安という地域の、地獄坂よりもずっと高く長い山道でした。それはわが女子校の6人と他校の男子学生4人の下放先で、北京から千キロも離れた、24世帯しかない、小さな貧しい村落です。村では燃料の薪取りに行かなければなりません。日本語では牡丹雪と言いますが、中国語では、鵝毛（がもう）、と表現される羽根のような大雪が舞い降りる中、村人の後ろについて、山道に沿って枝を集め、小さな木を切って、薪にします。一往復で半日がかりの作業です。集めた薪を束ねて背負い、雪道で何度も転びながら運び下ろしました。道々、滑る雪、冷たい雪をどれほど呪い、罵ったか分かりません。

ところが今の日常では、雪が降るとスキー遊びができ、雪まつりを楽しめます。雪に災難に見舞われるということもあるし、雪に恩恵に恵まれるということもあります。同じ雪でも、環境や人間の生き方、考え方で全く別なものになってしまうのです。

あの山奥の村にも、雪は味方ではなかったとしても、山なりの恩恵がありました。山の斜面を掘って建てたヤオドン——洞窟——が村人や私たち若い新入植者の住まいでした。ヤオドンは冬には暖かく、夏にはひんやりしていました。かまどと“炕”（オンドル）が繋がっていて、かまどでご飯を炊くと、“炕”を通して寝床も同時に温められて、一石二鳥の構造です。

野上弥生子作『迷路』の最後の場面では、延安に行きたい主人公は願いが果たせぬまま、幕が降りました。その代わりに、1957年6月、既に72歳の作者自身が、はるばる延安の地に足を踏み入れました。中国対外文化協会の招待で訪中した野上弥生子は、その時広州、北京、河南の各地を訪れていましたが、わざわざ延安にも足を伸ばしたのです。帰国後に発表した『私の中国旅行』に、「…はじめての炕がもの珍しく、いまこそほんとうにこの国の家で眠るような、子供らしい喜びで眼をつぶった」(P146)と、“炕”の寝心地を述懐しています。まるで少女のような好奇心、嬉しさが紙面に躍如としていました。水を懸命に汲むお爺さんを見かけて、「おそらくこの井戸が唯一の頼りで、左手に見あげられる山壁の洞窟から汲みにおりするには、手桶いっぱいの水も非常に貴重であったに違いない」(P184)と、土地の厳しい水不足も作者の鋭い観察の目から逃げられません。

私たちが下放した村の山麓には道路に挟まれて、延河という川が流れています。しかし雨が降らなければ、川と言っても名ばかりで、ズボンの裾を脛まで巻き上げてざぶざぶと歩いて渡れるほどで、橋もなかった筈です。だから、生活用の水は、二つの小山を越えた向こうの唯一の井戸から汲まなければならないのでした。水を運ぶ時は肩から背中までを全て使って天秤棒を支え、左肩右肩を交互にしても、水の重さに体の重心が取られ、酔っばらいのようです。洞窟に辿りつくと、苦勞して汲んだ水は半分も残っていません。それで、その貴重な水で顔を洗う私たちを見ると、村の人はとても不可解がありました。村人には洗顔や歯磨きの生活習慣はありませんでした。農作業の休憩中、よく晴れた日には男子も女子も人眼をお構いなしで、その場で上着を脱ぐと、衣服にたかった蚤をパチパチと指で潰していたのでした。

村人の9割は文盲でした。ある日、50代の人に「蒋介石って何人なの？」と聞かれました。「中国革命の聖地」と言われる延安が目前にあるのに、現代中国の激動の年代の主たる登場人物も知らないとは、大変驚きました。別の日には、珍しく街へ出かけて、村に帰ってきたお年寄りが、「街で飛ぶ犬を見たぜ」と大興奮でした。詳しく聞いてみると、何と「飛ぶ犬」の正体

は、北京ではよく乗っていた乗り物の自転車なのでした。しかし、とても平和で、心の優しい人々ばかりです。彼らは火起こしや水汲みから農作業まで親身になって教えてくれました。

何故か、ある午後的一幕が未だに鮮明に脳裏に刻まれています。私は用事のため、朝一人で役所へ出かけました。昼過ぎに村に戻り、川を歩いて渡ろうとしたら、朝は大人しかった清流が数倍も広く、腰までの深いドロドロの急流に豹変していました。2、3日前に上流の方で大雨が降り続けているとの話を思い出しました。躊躇の暇は許されない！ 今渡らなければ、水が引くまで村に戻れなくなり、長い時は半月も待たなければなりません。

日頃村人から聞いたように、服のポケットを裏返しにして、裾をできるだけ巻き上げ、脱いだ靴もカバンも頭に載せると、流れに体の正面を向け、流れに逆らって遡るように川を斜めに渡り始めました。遠い山頂からかすかに声がゆらゆらと漂って来ます。水の轟音のために何を言っているかはわかりません。言葉にもならないただの気流の向こうには、黒い点々の一列が見えます。作業中の村人たちです。不思議に一步一步ゆっくりと進めました。音を立てている流れの勢いで体が倒れそうになっても、背中を流れの方に持って行かれないよう、踏ん張って渡り続けました。

下放は、私が社会人になったスタートです。不本意で、重苦しい歳月ではありましたが、生きることの厳しさと共にその営みの豊かさに直に触れ、忍耐強く、諦めないことを教えられました。社会の底辺の多くの素朴な人々に接し、勇気付けられ、それまでは考えてもみなかった生きることの尊さ、愛おしさも味わいました。

あの辺鄙な山村で、私たち都会から来た若者は、小さな学堂を開き、自分の知っていることを伝えようともしました。日々の労働のほとんどが人力頼みだったため、下放の後半に村を離れて工場で電気修理工になった時には、最初の給料を「農機具でも買って下さい」と村に寄せました。恥ずかしいほど金銭感覚がなかったため、雀の涙ほどの額にしか過ぎず、結局、村からは地元の特産、棗（なつめ）が一杯届けられました。

異文化、回り道の冒険

昨年9月、延安大学に向かう途中、あの村に2時間ほど立ち寄りました。村はずれの道に入るやいなや、そこでたまたま道路を補修していた人の口から私の名前が飛び出しました。間髪入れずに「年を喰ったな！」と減らず口も飛んできました。ご本人こそ、昔は鼻水垂らしの坊主だったくせに！ 彼の話では、お祖父さんが生前によく私たちの当時の写真を一人一人指さしながら彼に聞かせていたそうです。その写真は、村から20キロ離れた市場の写真屋まで来てと歩いて行って、撮ってきたものです。

村には今はガソリンスタンドが建ち、山へ薪を拾いに行く必要はなくなりました。当時は荒野を開拓しても、トウモロコシや豆類の雑穀しか作れず、野菜と呼べるものは大根くらいで、果物なら棗以外には何もない暮らしでした。今は、どの家の庭先にも野菜が青々と植えられ、にこにこ笑いながら運んできたのはみずみずしい西瓜でした。ちょっと見たら、夫婦とも髪の色を黒々と白髪染めで染めて、もちろん部屋の中には、洗面器、歯ブラシなどもちゃんと並べてあります。

次の家では、ご主人がアルバムをめくり、故宮や万里の長城で撮った記念写真を私に見せながら、「お正月に、息子夫婦がプレゼントしてくれた旅行だ。わしはもう汽車も飛行機も船も、全ての乗り物に乗った！」と誇らしげに教えてくれました。思わず、「飛ぶ犬」を見かけた47年前のお年寄りのことを思い起こして、感銘を受けました。

下放した時に体験した日々が無条件に美しかったわけではありません。それでも、諦めずに、確かな足でその土地を踏みしめ、その土地の人たちと同じ時間を短い間でも共有したからこそ、なおさら現在の村を見て思うことがひとしおでした。

振り返れば、下放で生活を共にした山の村での経験は、私にとっては最初の冒険、異文化に手を触れ、心を開いたチャンスでした。後ほど私を日本留學まで押し出した土台かつ原動力なのでもあるのだと思います。

下放は私にとってはまた、異文化との付き合い方を養ったトレーニングで

もありました。自分にとって外側の人間, その人々の生活, 世界観を尊重し, それらを受け入れようと心得ること。その心得によって, 物の見方を養い, 視野を広げ, 心遣いや思いやりなどの生活態度を学ぶこと。立ち遅れていると思われる地域も, 人も, 彼らなりの価値感がある筈です。それらを発見しようとすることは自分を変えることを可能とする, 大きなプラスになります。異文化に配慮をし, 異文化間の橋渡しをし, 異文化を主体的に取り入れる姿勢が大切です。

いつも, 選べないかつての日々があったから, 選べる今日のすべてのチャンスをやより一層有難く感じ, 大事にしたいと思ってきました。逆にいつも選べる時代, 選べる環境にいたら, 却って別にそれは有難くも感じず, 素晴らしいチャンスも容易に見逃してしまったかもしれません。早いうちにそのことに気づかせてくれた出会った土地, 出会った人々に感謝したいです。

6 中日交流の来た道

相互理解の道を歩む, 彼も我も

ここ数年中国と日本の間, 「ゴタゴタ」が続いています。日本にいる中国人としては, 間に板挟みになるようで, 胸が痛く, やりきれない気持ちです。

2014年12月には, 西園寺一晃先生が札幌孔子学院の招きで来道して, 講演を行ないました。一晃先生は, 50年代からご両親と共にご一家で10年間を北京で過ごされた知中派です。この中国生活中に文革に遭遇し, 日本に帰国後, 『青春の北京』という本を出版しました。この著書が, 当時数少ない日本語書籍の1冊として我が四川大学図書館の書棚を飾っていました。日本語の読書に極端に乏しかった時代なので, クラス中が『青春の北京』を読み回しました。好きな段落や表現をノートに写して, 生きた日本語勉強の資料として重宝しました。数年後, 私は仕事上, 思いもよらず, ご一家の中国訪問のご案内にお供しました。こういった経緯があったので, 札幌の講演にも駆けつけました。

演題は「日中関係に思う——過去・現在・将来」でした。日中交流の大先輩である先生のお話を聞きながら、自分自身もそれなりに中日関係の40年間を見て、歩んで来たという気持ちが湧きました。と、思い出に浸って講演会が終わると、後ろから「先生！」と私を呼ぶ声がありました。3年前に卒業した女の子でした。

彼女は商大を出てから、孔子学院で中国語の勉強を続け、その後、日中友好協会の派遣留学で、上海師範大学へ行くことになりました。上海から送られてきた彼女のメールによりますと、「今回の留学を決めたとき、真っ先に先生が授業で言っていた言葉の数々を思い出しました。そして昨年お会いした時、『今の日中関係がよりよいものとなってほしい』とおっしゃっていたこと…日本と中国、その関係性がよりよいものとなっていくよう、私も強く願っています」。

私達3人は大先輩、先輩、後輩とでも言えるでしょうか。そのメールを読んで、民間人として、この二つの国の間で互いに仲良くしていきたいと願う仲間が一人でも増えればと嬉しく思いました。

昨年1月、今度は商大104教室での自分の最終講義中に、あいにく私の研究室あてに中国からの電話が入りました。教務課の伝言では、私が商大に赴任して最初に担当した中国語クラスの学生によるものだそうです。遠慮して電話番号を残さなかったようですが、中国での勤務先からなのか、それとも中国への出張先からなのか見当がつかず、顔も全然思い当たりませんでした。しかし、きっと同じく中日・日中の相互理解に励んでいる仲間だと思い、何よりのなむけだった、と胸が熱くなりました。

また、1977年、今から思えば新しい中日関係の青春時代に、大学を出てから間もなく案内した「日中友好青年の翼」で出会った友人のことをも思い出します。この「友好の翼」とは、中国と日本の青年交流の一環として、日本からの訪問団が中国を15日かけて回る旅で、武漢での旅程を私はお供しました。日本から来た現役バリバリの大学生諸君は元気いっぱいでした。昼間の見学日程を終えて夜宿泊所に戻ってからも、皆の見聞や感想、疑問などを、

話したり、議論したりしました。「促膝谈心」という中国語の日本語訳、「膝を交えて語り合う」と言うのもその時に覚え、知り合った孝子さんとは数十年にわたり、文通を続ける友人ともなりました。

彼女は中国の旅から日本に戻ると、すぐに中国語を学び始めました。卒業後、上海駐在の日本企業に長年勤めてから、今は中国内地の大学で日本語を教えています。数年前に一度上海で再会しました。筆まめな彼女はその後すぐ手紙を寄越してくれました。「まるで33年前に戻ったようですね。33年が過ぎて、中国人の裴さんが日本にいて、日本人の私が中国にいるのも不思議な気がします。『日中友好万歳!』かな。」って。孝子先生の中国人の教え子は今何人も日本に留学しています。

中日交流の来た道を振り返ると、日本人も中国人も互いに近寄り、肩を寄せ合って相互理解を深め、よりよい関係作りに力を合わせている、多くの人々がいました。その後ろにこれから大いに寄与しようとする若い仲間たちもしっかりと近づこうとしています。

心を通い合わせ、共に“和”を進めよう

振り返ってみると、日本語は私の初恋ではなかったし、これまで結局日本語に連れ添ってきてしまったのは、いわば偶然でした。日本語という異言語を通して、日本に留学し、日本で天職を得て、語学が生涯の糧になるとは、自分でも予想できなかったことです。外国語の勉強は決して飾り物ではなく、より豊かに生きていく、人生の財産だと思つづく思います。

したがって、異なる言葉を学ぶことで得るものは、その言葉を自由に使えるようになることだけではありません。自分の文化、相手の文化の認識を深める武器、あるいは道具になります。異文化に触れることで、自分、そして自分の国を客観的に見つめ直すチャンスが得られます。そうした違った認識をどう共存させていくかを深く考えさせられます。互いに軽蔑したり、差別したりするものではありません。相手の方へ近寄り、それぞれの文化や歴史を謙虚に問い、語り、考える中で、他人の価値観に配慮する大切さを学びます。

相互の違いを確認し、異なる価値観が共存する道を共に模索します。それが、語学の習得、ひいては教育の大きな目的ではないかと思います。

相互理解の礎は、心の通い合い、心と心の交流にあります。心の通い合わせもまた相互信頼、相互尊重によります。互いに相手を思い、相手を心から受け入れようとするのです。相手を受け入れることが、自分自身を相手に受け入れてもらうことにもなります。相互とも真摯な誠意と理解があれば、「ゴタゴタ」、いいえ、摩擦と対立が最大限に避けられます。それこそ“和”に通じる行方ではないかと思います。

昨年は中日国交正常化45周年で、両国の親善象徴として上野にパンダがやって来たのも45年前。去る6月にパンダの赤ちゃん、シャンシャン(香香)が生まれ、日本だけではなく、中国でも話題を呼んでいました。今年は更に中日平和友好条約締結40周年を迎えます。中国と日本は引越しのできない隣人です。これから両国の関係と協力はますます重要になります。これらの節目に乗じて、社会に生きる民間の人々そして特に若者たちが日常的な交流を通して一層心を通い合わせて、相互理解を促し、共に手を携えて、“和”の道を進めていければと切に願って止みません。

最後に、日本語に出会い、留学もし、ここ、商大で母国語の中国語を教える立場まで賜りました。力不足で、あまりお役に立てない自分に悔しく、歯がゆい思いもよくありました。それでも、同僚や仲間、職員たちに助けられて、私なりに責務を果たして参りました。努力が足りなかった面もあったかもしれませんが、屈託のない学生に支えられたことも大きかったです。商大にて過ごした日々を懐かしく思い、商大にてお世話になったすべての皆様にただただ感謝を申し上げます。